

豆本の愉しみ：福井県の郷土豆本「えちぜん豆本」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 膽吹, 覚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10382

ようこそ、本の世界へ(1)

まめほん たの
豆本の愉しみ—福井県の郷土豆本『えちぜん豆本』—

語学センター 准教授 膽吹 寛
(いぶき・さとる)

豆本は手のひらサイズの小型本です。総合図書館にも『えちぜん豆本』(40点)、『福井豆本』(10点)、『府中豆本』(1点)などが所蔵されています。これらの豆本は「郷土豆本」と呼ばれています。戦後間もない昭和28年(1953)、北海道で『えちぜん豆本』が出版されたのをきっかけに、その後、日本全国各地で郷土色を活かした「郷土豆本」が多く出版されるようになりました。

それでは本館所蔵の『えちぜん豆本』のシリーズ〈写真1〉から、私が興味をもった豆本をいくつか選んで紹介します。

まずは、『えちぜん豆本』の創刊号である『越前加美鑑』(No.1-1964)です〈写真2〉。書名の『加美鑑』は和紙の見本帳という意味です。本文には越前和紙の歴史とその種類について紹介され、和紙の見本も貼られています。装丁は縦7.8cm×横11cmのやや横長の書型で、3つ目綴じ——背の部分に3つの穴をあけて、そこに糸を通して結んで綴じただけの簡略な装丁。豆本ではよく見られる綴じ方です。——です。表紙には越前和紙の檀紙を、本文には同じく越前和紙の一種の簾ノ目局紙を使用しています。この豆本は越前和紙だけで作られ



〈写真1〉



〈写真2〉

ているところが見どころで、創刊号に相応しい1冊といえるでしょう。

2点目は、『逃散』(No.8-1966)です〈写真3〉。縦10.8cm×横7.8cmで、3つ目綴じです。本書は坪川健一作の舞台『逃散』の脚本です。時は江戸前期の寛永年間、舞台は越前国米の浦の庄屋の家です。逃散とは生活苦のために住み慣れた土地を捨てて、他国へ逃げることです。本書は芝居の脚本ということで、本文の中ほどに写真のように舞台の様子が飛び出す仕掛けがなされています。豆本であり、Pop-up Bookでもあるところが、本書の特徴です。

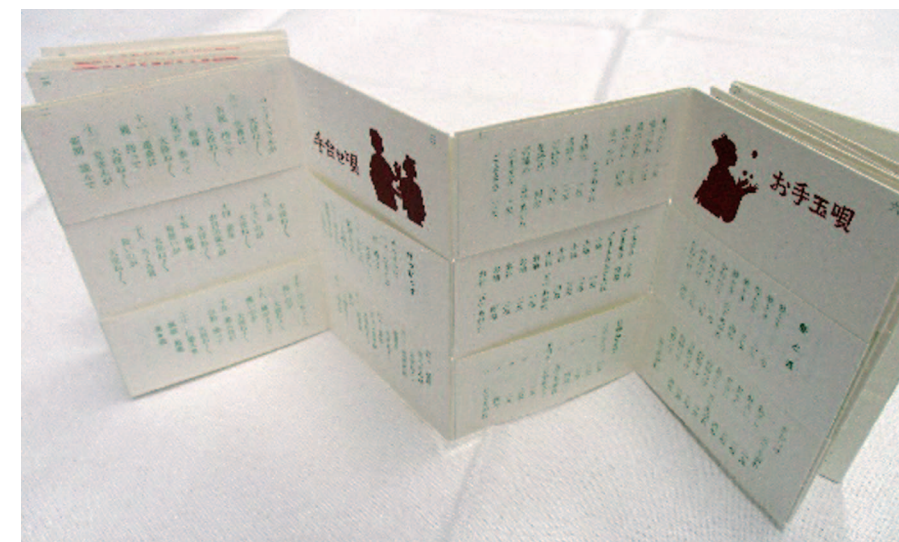
最後に『越前童唄』(No.12-1967)を紹介しましょう。縦10.8cm×横7.7cmですが、〈写真4〉のように折本に仕立てられており、展開することが



〈写真3〉

できます。また、各ページに横に2本の切れ目が入っており、そこに1枚の紙を挿入して表裏を替えることで、本文の差し替えができるという意匠を凝らした装丁になっています。本書に収録された童歌は、伊藤スズさん(明治18年、丸岡生まれ)が伝承されたものを記録したものです。

書物の内容をその装丁にどのように表現するか。そこが豆本を「作る」愉しみであり、「見る」愉しみでもあります。残念ながら、本館の『えちぜん豆本』は館外貸出しが禁止されていますが、郷土資料室内での閲覧は可能です。また、現在では豆本を作る教室も開かれていますし、切って作れる豆本用紙付きの本も市販されています。みなさんも一度、豆本を手にとってみたり、その制作に挑戦してみたいかがですか。



〈写真4〉